

ア テネ・オリンピックは日本人選手団の華々しい活躍が目立った大会だった。しかし、今回のオリンピックでもう一つ興味深かったのが、ギリシヤのお国柄がいたるところに発揮されていた点だ。

まず、開催前の会場建設の段階から、ギリシヤ的だった。あまりに工事のペースがのんびりしていたため、開会式までにスタジアムが完成するのといった危惧が最後まで取りざたされていた。

大会が始まると、今度はギリシヤ人警備員たちののんびりした警備ぶりが話題になった。

今回はテロの危険があるので、特別に厳重な警備が取

られたとの話にもかかわらず、テレビには、競技の最中タバコを吸いながら楽しげに競技を観戦する警備員たちの姿が映し出されていた。メダルを取ったギリシヤ人選手に、思わず握手を求めるギリシヤ人会場スタッフの姿が映されたりもした。

もともとヨーロッパでギリシヤ人というと、のんびりしていて、議論好きで、集団的な行動が苦手というイメージがある。おおむね、このイメージは間違っていないし、今回のオリンピックを見てみると、そんなギリシヤらし

さが、ハイレベルな競技の合間に、ほのぼのとしたローカル色を感じさせ、心優しい気分になった。何もかもがカッチリと格好良くまとめられた大会より、個人的にはずっと好感が持てた。

ところで、ギリシヤ人にはギリシヤ人のイメージがあるように、ヨーロッパのそれぞれの国には、その国に付き物のイメージがある。ヨーロッパの私たちは、そうした国民性の違いを誇張して日常的にジョークのネタにして楽しむのが好きだ。そのようなジョークのことを、「エスニック・ジョーク」

旅の曲者

19

ギリシヤ人のように

組織的……?

文・写真／田中真知
Tanaka Machi

という。

以前、アテネを訪ねたとき、町の土産物屋で、よく「天国とは」「地獄とは」と書かれたTシャツを目にした。それによると、天国とは「警官がイギリス人、シェフがフランス人、技術者がドイツ人、恋人がイタリア人、そして裁判官がスイス人」のような世界であるという。

一方、地獄とは「警官がドイツ人、シェフがイギリス人、技術者がフランス人、恋人がスイス人、そして裁判官がギリシヤ人」からなる世界だという。

なんとという皮肉だろう。

また、これをさらにひねった「完璧なヨーロッパ人」というジョークをプリントしたTシャツや絵はがきも見かけた。

それによると、「完璧なヨーロッパ人」の条件とは、イギリス人のように料理上手で、フランス人のように安全運転で、ベルギー人のようによく働き、フィンランド人のように弁舌さわやかで、ドイツ人のようにウイットに富み、ポルトガル人のように器用で、スウェーデン人のように融通が利き、

イタリア人のように自制心が強く、
アイルランド人のように酒を飲み、
スペイン人のように控えめで、
オランダ人のように気前よく、
ギリシヤ人のように組織的で……。

言うまでもなく、これもまた大いなる皮肉である。実際はすべて逆のイメージで見られているからである。エスニック・ジョークには、こうしたステレオタイプ的な国民性のイメージを、さらに誇張し、ユーモラスなジョークにして笑い飛ばすことによって、逆に文化の違いを超えて親密さを深めようという意図が感じられる。

エジプトに暮らしていたときにも、「ノクタ」と呼ばれる小話を耳にした。

ここではバカにされる対象は、主に南部エジプト出身の田舎者（サイーデイ）である。一例を紹介する。

隣に住んでる男がテレビを買ったので、サイーデイも「自分もテレビを買おう」と思って店に行く。けれども、店員に断られる。そこでサイーデイは、こんなかつこうをしているからばかにされるのだと思って民族衣装のガラベヤを脱いで洋服に着替え、ふたたび店に行く。それでも、やはり断られる。

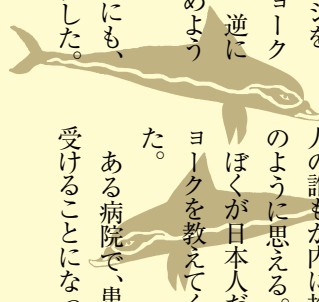
サイーデイ「なんでオレにテレビを売ってくれないんだ？」
店員「だって、うちは八百屋だからね」

田舎者の愚かしさをあざ笑う小話は数多い。今もパソコンや携帯電話の普及など日常生活のハイテク化に伴い、それについて行けない困惑をサイーデイに託した小話が次々と生まれている。

つまり、ここでいう「田舎者」とは、実際の南部エジプト人を指しているというより、現代に生きるエジプト人の誰もが内に抱え持っている自画像のように思える。

ぼくが日本人だと知ると、こんなジョークを教えてくれたエジプト人もいた。

ある病院で、患者が脳の移植手術を受けることになった。見ると、手術台の





ギリシャのエーゲ海に浮かぶサントリニ島。夕暮れになると、白い町がバラ色に染まる。

そばに移植用の脳がいくつか並んでいる。それぞれ日本人の脳、アメリカ人の脳、エジプト人の脳と書いてある。

「どれにするかね？」医者がいう。

「値段は、日本人の脳が50ポンド、アメリカ人の脳が100ポンド、エジプト人の脳は50000ポンドだ」

患者「なんかの間違いじゃないですか。なんでエジプト人の脳がそんなに高いんですか？」

医者「そりゃあ、きみ。ぜんぜん、使っていないからね」

日本人のぼくを相手に、自分自身をジョークのネタにして楽しんでしまうエジプト人のおおらかさには、感心を通りしして呆れてしまった。

しかし、こんな風に自分たちを笑い飛ばすことによって、彼らは日々の緊張やストレスをも笑い飛ばしているのかもしれない。

では、アジアではどうだろう。ぼくの知るかぎり、アジアではエスニック・ジョークをあまり耳にしない。特に日本の場合、他国と国境を接していないこともあって、異文化や他者の感覚そのものが曖昧である。加えて、過

去の戦争という歴史的な経緯もあって、日本がアジア諸国を揶揄するようなエスニック・ジョークを発した場合、感情的な反応が返ってくる可能性も高い。

ジョークがジョークとして機能するためには、互いの信頼関係が不可欠だ。

国境を接して長い交流の歴史があったヨーロッパ諸国間には、アジア諸国にはない一体感があるのかもしれない。EUという共同体の成立を可能にさせたのも、経済的利害の一致という理由に加えて、基本的なところで、互いの存在と違いを認め合う共通する姿勢があったせいではないか。

振り返ってアジアを見ると、そこまでの信頼が築けるほど関係が成熟しているようには思えない。日本が中国人や韓国人をしゃれたジョークで揶揄し、それに対して相手もむきにならず、気のきいたジョークで返してくるような空気が生まれれば、アジアの風通しもいちだんとよくなるように思う。その意味でも、四年後の北京オリンピックが今から楽しみである。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」（北東部編・中南部編、凱風社）「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック「神の刻印」（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。

